

the course of my study. I am most indebted to Mr. Kentaro Nakatomi, who gave me an opportunity to study his valuable collection which constituted the base of this study with a lot of useful data. Messers. K. Kimura, S. Tsuyuki also gave me a liberty to study their collections for which I am very grateful. My thanks should also be due to Drs. K. Kurosa and K. Morimoto for their useful suggestions. Besides the friends as mentioned above, who helped me concerning directly the present study, my studies on *Carabus* have always been supported by the friendly cooperation of Messers. Jiro Komiya and Kyoichi Nishikawa to whom I express my cordial gratitude. Finally, I would like to dedicate this series of studies to my friend, the late Mr. Yukiaki Kumagai, who was an enthusiastic student of *Carabus* and would have been a co-worker of mine with this problem.

新 著 紹 介

S. F. Sakagami and C. D. Michener, The Nest Architecture of the Sweet Bees (Halictinae): A Comparative Study of Behavior. ii+ii+135 pp. University of Kansas Press, Lawrence, March 23, 1962. \$5.00.

本書は、花蜂群の研究で命名ある日本昆虫学会会員坂上昭一博士と C. D. Michener 教授の共著になるもので、従来散在していたコハナバチ類についての知見と、著者等によつてなされた多くの観察とを総合考察した好著である。その述べるところは極めて広範囲に亘り、営巣場所、群集性、巣の坑道、育房の排列、育房の形態、冬季の被覆、古巣の利用、巣の分類、巣の構造と分類との関係、巣の構造と社会組織との関係、巣の記載方法、巣の構造の進化など多くの項目がとりあげられ、単にハナバチ類の研究者のみならず、蜂類学者、生物社会研究学者、一般昆虫学者および同好者にも興味深く読むことができ、また将来の研究分野に対しても多くの示唆を与えたもので、昆虫学上の大きな貢献である。ここに氏等の労作に深い敬意を捧げ、その出版を祝うと共に内容の一端を紹介し、広く会員に愛読を奨める次第である。(安松京三)

キイロカミキリモドキの食樹

中 村 慎 吾

キイロカミキリモドキ *Xanthochroa hilleri* Harold の食樹としては確実な記録がなく、藤村 (1956) がツガと推定される針葉樹の倒木を記録しただけである。

私は本種の幼虫をアカマツ (*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.) の腐朽木より採集した。棲息していたアカマツはかなり腐朽しており、非常に多湿な材部であつた。孔道は藤村 (1956) の記録に一致する。

老熟幼虫は5月末より蛹化し、6月10日前ごろ羽化した。さなぎの期間は12~14日間であつた。5月末、老熟した大型の幼虫と、それよりいちじるしく小さい若令の幼虫の2型が認められた。小型の幼虫は明春、老熟すると考えられ、成虫の活動期より推定して、昨夏産卵されたものと言えるので、キイロカミキリモドキは1世代を経過するのに2年を必要とするのではなからうか。

本地方でキイロカミキリモドキは6月中旬より8月末ごろまで成虫が出現し、誘蛾灯へよく飛来する。